

おばあちゃんのなみだ

ぼくのおばあちゃんは、さいきん足こしがよわって、つえをついてあるいている。そのおばあちゃんが、

「ふなつじんじやにいつてみたいな。こどもころ、みんなであそんだんだよ。あのころはたのしかったな。」

と、なんどもなんどもいうようになった。ある日、おとうさんが、

「ばあちゃん、そんなにいききたいのなら、いくか。手つだうよ。」

といい出した。

（ふなつじんじやの石だんは、二百だんはある。あの足で、どうやってあがるんだらう。）

「たいちもいくか。」

ぼくは、ゲームをやめてついていった。

じんじやの下までは、おとうさんの車でいった。おばあちゃんは、つえをついてゆっくりといっぽずつあるいて、石だんのまえまでいった。おばあちゃんは、ながい石だんをじつと見つめている。

（やっぱりむりじや。）

ぼくは、早くかえってゲームのつづきがしたかった。すると、おとうさんが、

「ばあちゃん、せなかにつかまれや。」

といいだした。

（えっ、だいじょうぶかな。）



「むりせんでええけん。」

「のぼりたいんだろ。そのためにきたのに。」

おばあちゃんは、ことわっていたが、とうとうおとうさんにおんぶされた。ぼくは、すこしはなれたころで見っていた。

おとうさんは、おばあちゃんをせおって、一だん一だんあがっていく。

「すまないね。おもかろう。」

「かるいかるい。たいちよりかるいわ。」

と、おとうさんはわらっている。

はんぶんまでいったとき、

「なつかしい。ともだちとあそんだところだ。」

うれしそうにわらっているおばあちゃんの目には、なみだがたまっていた。

おとうさんを見ると、あきだというのにひたいにあせが出ていた。いきもつらそうだった。ぼくは、おもうず、おばあちゃんのせなかをささえていた。

「ありがとう。ありがとう。」

おばあちゃんは、なみだをふきながらとてもうれしそうだった。おとうさんのすがたがかっこよくみえた。

「おばあちゃん、早く大きくなって、つぎはぼくがおぶってあげるからね。」

「ほんとうかい。それは、たのもしいな。」

三人でわらった。

